令和４年度　年報

大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

目　次

１　ごあいさつ　……1

２　「芸に親しむ機会作り」　寄稿　広瀬　依子　……2

（運営懇話会殿堂入り部会委員、追手門学院大学文学部講師）

３　上方演芸資料館運営状況（令和４年度）　……5

４　収蔵資料の紹介

「「浪花二〇〇カまち請角力」について」　荻田　清　……16

（運営懇話会資料整理・活用部会長、梅花女子大学名誉教授）

「砂川捨丸の『不如帰』」　大西　秀紀　……22

（運営懇話会資料整理・活用部会委員、

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）

５　収蔵資料の紹介（資料整理の現場から）　……26

６　上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等　……35

【表紙の写真】　二代目一輪亭花咲のぼてかづら

大阪にわか師の二代目一輪亭花咲によって作られた紙製のかつら。ぼてかづらは、にわか師が自らの頭の形に合わせて作っていた。そのことを示すように、内側に「二代目花咲作」と記されたものもある（写真左手前）。

ごあいさつ

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）は、平成31年４月にリニューアルオープンし、今年で５年目を迎えました。リニューアル後は、大阪人のアイデンティティの一つである「笑い」をはじめとする上方演芸の素晴らしさをより広く発信していくため、体験エリアに、Ｍ－１グランプリのファイナリストと写真撮影ができるコーナーや演芸人とにらめっこができる機器を設置するなど、様々な世代が楽しめるよう創意工夫をしながら運営をしております。

リニューアルオープン５年目にあたる今年は、あらためて、上方演芸とは何かについてお伝えし、上方演芸への理解を深めていただくための企画展「What is 上方演芸？～上方演芸ってなんだろう？～」を10月6日より開催しております。

今回の展示では、大阪が誇る上方演芸の歴史や活躍された演芸人について、落語、漫才、講談、浪曲、諸芸のジャンルごとに、収蔵資料とともにご紹介しておりますので、多くの皆様にご覧いただければ幸いです。

また、平成８年の開館より、上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる方を、「上方演芸の殿堂入り」として表彰してきましたが、今回の表彰で63組100名となりました。

殿堂入り100名を記念して、8月には大阪府立中之島図書館のご協力のもと、これまで殿堂入りされた演芸人をイラストにより紹介する展示を開催しました。また、資料館でも、今回殿堂入りされた２組を紹介するコーナーを設置し、演芸人の足跡を紹介しております。

当館の運営についてですが、大阪府内はもとより、関東方面や九州方面など、関西以外の地域からの来館者も増えつつあります。10月には、新型コロナウイルス感染症の影響により見送っていた館外での展示が２年振りに実現し、摂津市ゆかりの漫才師・砂川捨丸特別展示を、摂津市のご協力のもと開催しました。この場をお借りして、展示にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

また、団体来館についても広報を強化しており、今年度も、修学旅行生や地域の団体など、多くの方にご来館いただいております。今後とも、様々な展示やイベントにより、世代を超えた多くの方々に親しまれる資料館として努めてまいりますので、関係者の皆様方には、一層のお力添えをお願い申し上げます。

結びに、本年報を通じて、多くの方に当館の取り組みを知っていただき、ご来館いただけますと幸いに存じます。

令和５年１２月　　館長　柳生　小夜

演芸に親しむ機会作り

広瀬依子
（殿堂入り部会委員）
（追手門学院大学文学部講師）

子どもの頃から演じることに興味を持っていた。表現すること、鑑賞することの両方に魅かれていたが、どちらかと言えば演者になりたかった。絵本や小説の登場人物のセリフを音読しては、あちら側＝舞台上の人になりたいと思ったものである。

しかし、成長につれて、自分にはとてもその能力がないと悟ったのである。それでも何か表現に関する仕事ができればという思いが残っていた。幸い総合芸能雑誌編集者の職を得て、27 年間を過ごした。今は大学で舞台芸能に関する授業を担当しており、職種は違っても舞台の近くにいられるのをありがたく感じている。

何を好きになるかは、家庭環境が影響している場合が多いのではないだろうか。家族の誰かが芝居好きであったり、芸能の仕事に携わっていれば、自然と関心も湧く。しかし、両親・姉・私の四人家族の我が家はそうではなく、家でテレビドラマを見るぐらいであった。私はいわば「突然変異」なのだろうか？

いや、そうではない。幼い頃を振り返ってみると、思いあたる節がある。当時（昭和 40〔1965〕年代）、父は吉本興業の株を購入していた。そのため、毎月、吉本の寄席に行ける株主優待券が届く。小学校低学年だった私は、高学年の姉より毎日早く帰宅していた。そこで母は月に１～２回、京都・新京極にあった京都花月へ私を連れていってくれたのである。

これが、演芸や舞台芸能に触れるようになったきっかけだった。この経験は、後の仕事にもつながっている。ちなみに、姉はほとんど行く機会がなかったためか、今も演芸や舞台芸能にはあまり関心がない。同じ家庭で同じように育てられても、趣味嗜好の違いはある。幼少期の体験は、思いのほか重要なのであろう。

今考えると、寄席という形態に出逢えたのも良かった。さまざまな芸を一度に鑑賞できるのである。飽きることがない。一口に演芸と言っても、異なる表現方法があることを知り、学ぶことができた。また、１か月の興行が上席・中席・下席という編成になっていることも知らず知らず覚えた。とはいえ、小学生だった私には学んでいるという意識はない。ただただ、楽しんでいた。

漫才では中田ダイマル・ラケットさん、Wヤングさんによく笑わせてもらった。若手だった横山やすし・西川きよしさんは客席に迫ってくるような勢いがあった。落語では、露乃五郎さん（後の露の五郎兵衛さん）が記憶に残っている。子どもには少し難しい内容で、正直なところあまり理解できなかったが、周りの大人は皆笑っていた。その様子を見て、私も早く大人になり、落語を聞いて笑いたいと憧れがつのったものである。

新喜劇では花紀京さん、桑原和男さん、船場太郎さん、片岡あや子さん、山田スミ子さんなどが活躍されていた。開演中にロビーに出ると、座員の方々が稽古をされていることもあり、舞台裏を少し覗けたようで得をした気分になったのも思い出である。

舞台裏といえば、寄席の近辺でも、いろいろな演者さんをお見かけした。京都花月の隣にあっ

た化粧品店では、女性漫才師の方々がよく買い物をされていた。舞台上では笑顔いっぱいの漫才師が、店員さんに相談しながら真剣な眼差しで商品を選んでいたのを覚えている。

中でも強く印象に残っているのは、ジャズ漫画の木川かえるさんである。流麗な筆と軽妙なトーク。どちらかと言えば大人向けの芸だったが、ある時、客席の子どもたちに呼びかけられた。誰か舞台に上がってくれる方がいたら手を挙げてください、とおっしゃったのだ。一緒に描くのか、似顔絵を描いてくださるのか、記憶が曖昧なのが申し訳ないことである。

数名の子どもたちが手を挙げた。母は私に「あんたも挙げたら？」と勧めてくれた。挙げたい気持ちでいっぱいなのだが、恥ずかしくてどうしても手が動かない。もじもじしている間に別の子どもが指名され、舞台へと上がった。帰り道に、いや、数年間ぐらいは「挙げたら良かったなあ」と残念に思ったものである。挙げていたとしても呼んでいただけたとは限らないが、少なくとも寄席に参加した気分を強く感じられたと思うのである。

それから25年ほど後、かえるさんにお目にかかる機会を得た。勤務していた雑誌へのご寄稿をお願いしたところ快諾していただき、掲載写真を拝借にお伺いしたのである。打ち合わせが終わった後、上記の思い出をお話させていただいた。トレードマークのベレー帽と大きなメガネのかえるさんが、当時と変わらない笑顔で喜んでくださったのは、忘れられない思い出である。

現在の私は古典芸能や現代劇、ミュージカルの舞台、ライブなど各分野に足を運んでいるが、その原点が寄席にあることは間違いない。劇場への扉を開いてくれた演芸に感謝している。

一方、幼少期ではなく、成長してから演芸に出逢って興味を抱く人は一定数いる。そのような人びとに長く親しんでもらうことは、演芸そのもののすそ野を広げることにつながるのではないか。プロの演者はもちろん必要だ。しかし、舞台芸能は観客がいなければ始まらない。鑑賞したり、アマチュアとして演じる層も大事なのである。

学生時代、落語研究会に所属していた友人がいる。友人は卒業後もアマチュア落語を続けて約40年。今も職場の先輩や仲間とともに、折に触れて落語会を開催している。現役の会社員であるから、稽古や鑑賞に充てる時間は、学生時代と比べると少ないだろう。しかし、年齢とともに充実し、面白くなっていくのがよくわかる。学生時代は新鮮で勢いがあるのが魅力だ。ただ、中高年の人物造型をする際には、どうしても少し背伸びをしなければならない。それが、年を経ると内容や表現がしっくり馴染むようになるのである。

これは、出演者たちがさまざまな場所で経験を積むとともに、多くの舞台を鑑賞してきたからではないだろうか。たとえば登場人物の「はい」というひと言にも、さまざまな感情がある。喜んでいる、嬉しくてしかたがない、しぶしぶ、戸惑いながら、呆れて等、どのような「はい」なのかを明確にしなければならない。どの表現が的確か。経験と鑑賞が多くなると、表現の選択肢も増える。

アマチュア落語会の観客は、出演者の友人・知人が多い。初めは、友だちが出るから……と軽い気持ちで出かけても、落語の楽しさに目覚める場合があるかもしれない。そのような人びとがプロの落語を鑑賞するようになると、落語会や寄席の観客増加につながる。

また、落語の速記は物語としてもおもしろく読める。小説好きの人には、さほど違和感がなく入っていけるのではないか。そのような時に上方演芸資料館＝ワッハ上方を利用していただければ、さらに世界が広がると考える。

自分の話を繰り返して恐縮だが、昨年担当した授業で旭堂小南陵さんにお越しいただき、講談を二席披露していただいた。『あかぎれ膏薬』『妲己のお百』である。親子の情愛を描いた物語と、稀代の悪女が暗躍する物語だ。

初めは椅子の背もたれに体を預けて聞いていた学生たちが、話が進むにつれてどんどん前のめりになっていった。終了後、明瞭な発声、登場人物ごとに変わる声、緩急をつけた展開、視線の配り方や表情等に感銘を受けたという感想が多く寄せられた。初めて聞いたけれどおもしろかった、寄席に出かけてみたいという声もあった。さらに、自身の今後に参考にしたいという学生も多かった。学生である今も、社会人になった将来も、必ず人前で説明したりプレゼンテーションを行ったりすることがあるため、今回の講談を見習いたい、お手本にしたいという。

アマチュア落語のように芸そのものを行うことに加えて、自分の日常生活に活かせることとして演芸を捉える。それもひとつの親しみ方である。きっかけはひょんなことで良い。多くの人が触れる、親しむ機会作りが、演芸の今後一層の発展につながっていくと考える。

上方演芸資料館運営状況（令和４年度）

■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数・視聴ブースリクエスト件数〔月別推移〕

	入館者数	開館日数	１日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数（月計）
4 月	1,586 人	26 日	61 人	266 件
5 月	1,919 人	26 日	74 人	271 件
6 月	1,974 人	26 日	76 人	266 件
7 月	2,289 人	27 日	85 人	247 件
8 月	2,274 人	26 日	87 人	245 件
9 月	※1 1,785 人	※1 26 日	69 人	220 件
10 月	1,746 人	26 日	67 人	242 件
11 月	1,956 人	26 日	75 人	284 件
12 月	1,930 人	24 日	80 人	242 件
1 月	1,632 人	24 日	68 人	235 件
2 月	1,881 人	24 日	78 人	272 件
3 月	2,751 人	27 日	102 人	310 件
合 計	23,723 人	308 日	77 人	3,100 件

※１　令和 4 年 9 月 19 日 13 時から臨時休館（台風の影響）
〔休館日〕毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は、翌平日が休館日）及び年末年始

〔過去３か年（平成 31 年度～令和３年度）〕

	入館者数	開館日数	１日あたりの平均人数	視聴ブースリクエスト件数（月計）
R1	※2 34,541 人	※2 264 日	131 人	4,857 件
R2	※3 12,166 人	※3 266 日	46 人	2,509 件
R3	※4 13,212 人	※4 258 日	51 人	2,182 件

※２　平成 31 年 4 月 24 日（リニューアルオープン）～令和 2 年 2 月 28 日までの数値
　　令和 2 年 2 月 29 日から 3 月 31 日臨時休館(新型コロナウイルス感染拡大防止)
※３　令和 2 年 4 月 1 日から 5 月 18 日臨時休館(新型コロナウイルス感染拡大防止)
※４　令和 3 年 4 月 25 日から 6 月 20 日臨時休館(新型コロナウイルス感染拡大防止)
　　令和 3 年 11 月 30 日臨時休館（館内点検）

■ 上方演芸資料館運営懇話会　開催実績

2 回開催　（令和 4 年 6 月 10 日、令和 5 年 2 月 15 日）

■ 上方演芸資料館運営懇話会　各部会　開催実績

・殿堂入り部会

2 回開催　（令和 5 年 1 月 17 日、令和 5 年 2 月 9 日）

・資料整理・活用部会

12 回開催（月 1 回開催）

※上記以外に、現地研修会を大阪歴史博物館にて開催（令和 4 年 6 月 3 日）

・企画部会

2 回開催　（令和 4 年 7 月 6 日、令和 4 年 12 月 14 日）

・放送資料部会

1 回開催　（令和 5 年 3 月 17 日　書面による開催）

■ 研修会実施報告

資料整理・活用部会（資料整理に係る有識者会議）委員が研修を実施。

資料整理に関するテーマの研修を資料館職員が受講。

＜実績＞

開催日	部会	研　修　内　容	講師
4 月 19 日	第 1 回	上方講談の歴史	荻田部会長
5 月 17 日	第 2 回	上方講談の歴史資料断片	荻田部会長
6 月 14 日	第 3 回	大阪のレコード会社	大西委員
7 月 26 日	第 4 回	桂家残月資料整理	荻田部会長
8 月 23 日	第 5 回	桂家残月レコード	大西委員
9 月 13 日	第 6 回	大正後期の上方の寄席～桂家残月資料から～	荻田部会長
10 月 25 日	第 7 回	前田勇先生と『上方演芸辞典』	荻田部会長
11 月 17 日	第 8 回	麻生磯次著『笑の研究』	荻田部会長
12 月 13 日	第 9 回	初代桂文治と『落噺桂の花』	荻田部会長
1 月 24 日	第 10 回	上方落語の演題集	荻田部会長
2 月 14 日	第 11 回	『大寄噺の尻馬』の価値	荻田部会長
3 月 14 日	第 12 回	上方落語演題調べと『落語系図』索引	荻田部会長

■常設展示　開催実績

場　所	内容	展示風景
常設展示エリア	【テーマ・ねらい等】 　大阪弁の解説パネルや、歴史的価値のあるポスター展示のほか、映像音声視聴ブースを設置。上方演芸の歴史を知ることができるコーナー。 　令和４年度は、あ行、ま行を除く８行の展示替えを実施。	

■企画展示　開催実績

場　所	内容	展示風景
企画展示エリア	【テーマ・ねらい等】 上半期企画展示「蔵出し名品展」 期間 令和4年4月12日～9月30日 　平成8年11月15日に開館した資料館が令和3年11月で25周年を迎えたことから、府民をはじめ、たくさんの方々に寄贈いただいた収蔵品をあらためてお披露目する展示。 　時代を彩った演芸人の姿を彷彿とさせる衣装や愛用品などの名品を展示し、上方演芸の歴史や魅力を紹介。	

■企画展示　開催実績

場　所	内容	展示風景
企画展示エリア	【テーマ・ねらい等】 「イラストで振り返る上方演芸殿堂入り名人展」 期間 令和4年10月12日～令和5年3月12日 　平成8年度の開館以来、上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる演芸人を、「上方演芸殿堂入り」として選考し、表彰している。 　今回の展示では、これまでに殿堂入りされた演芸人61組97名の似顔絵イラストと収蔵資料の展示により、その足跡を振り返る。 　また、全ての殿堂入り演者の似顔絵イラストを描いた成瀬國晴氏（イラストレーター）が作画した下絵の展示や制作過程の動画もあわせて上映。	

■上方演芸の殿堂入り特別展示　開催実績

場　所	内容	展示風景
体験エリア	【内容】 第 25 回上方演芸の殿堂入り演者の展示 期間 令和 4 年 10 月 1 日～令和 5 年 9 月 30 日 　上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる演芸人を、「上方演芸の殿堂入り」として毎年表彰している。 　第 25 回上方演芸の殿堂入りをされた、笑福亭仁鶴さん、初代真山一郎さんについて、収蔵資料とともに紹介。	

■ 館内イベント開催実績

・体験型講習会（ワークショップ）及び専門家講演会　※主催事業

開催回数　34 回、参加者数　527 人

（開催期間：令和 4 年 5 月～令和 5 年 3 月）

・在阪放送局とのコラボイベント

「爆笑！天国寄席」

開催回数　2 回、参加者数　43 人

（開催日：令和 4 年 11 月 19 日・20 日）

＜内容＞

回数	開催日	内容	講師	参加人数
1 2	5 月 7 日	数字を使ったマジック	たらちね	26 人
3 4	5 月 21 日	講談の魅力、楽しみ方	旭堂みなみ	24 人
5 6	6 月 4 日	落語の魅力、楽しみ方	桂三語	20 人
7 8	6 月 18 日	浪曲の魅力、楽しみ方	春野恵子	26 人
9 10	7 月 2 日	落語の魅力、楽しみ方	笑福亭生寿	39 人
11 12	7 月 16 日	浪曲の魅力、楽しみ方	真山隼人	40 人
13 14	8 月 6 日	ジャグリング（諸芸）	もりやすバンバンビガロ	50 人
15 16	8 月 20 日	傘回し（諸芸）	豊来家板里	29 人
17 18	9 月 3 日	落語の魅力、楽しみ方	桂源太	33 人
19	9 月 17 日	「漫才の歩み、落語の歩み」	相羽秋夫	25 人
20 21	10 月 15 日	浪曲の魅力、楽しみ方	京山幸太	20 人
22	11 月 5 日	「千日前って、どんなとこ」	成瀬國晴	25 人
23	11 月 19 日	爆笑！天国寄席	福島暢啓、原田年晴、 関純子	23 人
24	11 月 20 日	爆笑！天国寄席	桂紗綾、植草結樹、 山本隆弥	20 人
25 26	12 月 3 日	傘回し（諸芸）	とんぺてぃーず	38 人
27 28	12 月 24 日	ジャグリング（諸芸）	もりやすバンバンビガロ	44 人
29 30	1 月 7 日	紙切り（諸芸）	笑福亭笑利	16 人

31 32	1 月 21 日	浪曲の魅力、楽しみ方	京山幸乃	11 人
33	2 月 4 日	五代目笑福亭松鶴　「天王寺詣り」	大西秀紀	16 人
34 35	2 月 18 日	落語の魅力、楽しみ方	笑福亭風喬	22 人
36	3 月 4 日	発見！桂家残月	荻田清	23 人

※　ワークショップは 2 部制で実施　　合計　570 人

・アマチュア団体との事業連携　※共催事業含む

開催回数　36 回、参加者数　510 人

（開催期間：令和 4 年 4 月～令和 5 年 3 月）

上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人があまたおられます。

上方演芸資料館では、平成８年度から、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛され親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」を決定しています。令和３年度（第 25 回）までに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど 61 組 97 名の方々が受賞されました。

第26回目となる令和４年度は、桂吉朝さん、今いくよ・くるよさんが受賞され、表彰式は、令和５年７月27日にシティプラザ大阪で開催しました。

桂吉朝

今いくよ・くるよ

（画）イラストレーター成瀬國晴氏

「上方演芸の殿堂入り」一覧表

第１回（平成８年度）	初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、 砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸
第２回（平成９年度）	ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・ラケット、花月亭九里丸
第３回（平成 10 年度）	六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童
第４回（平成 11 年度）	二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若
第５回（平成 12 年度）	四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児
第６回（平成 13 年度）	二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、冨士月子
第７回（平成 14 年度）	橘ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子
第８回（平成 15 年度）	都家文雄・都家静代、林家とみ
第９回（平成 16 年度）	夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし
第 10 回（平成 17 年度）	三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・小浜、宮川左近ショー
第 11 回（平成 18 年度）	ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵
第 12 回（平成 19 年度）	ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助
第 13 回（平成 20 年度）	横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ
第 14 回（平成 22 年度）	三代目桂米朝
第 15 回（平成 23 年度）	二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・けんじ
第 16 回（平成 24 年度）	上方柳次・柳太、岡八郎（コメディアンとして）
第 17 回（平成 25 年度）	川上のぼる、木川かえる
第 18 回（平成 26 年度）	二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ
第 19 回（平成 27 年度）	秋田Ａスケ・Ｂスケ、花紀京（コメディアンとして）
第 20 回（平成 28 年度）	三代目桂春団治、二代目春野百合子
第 21 回（平成 29 年度）	かしまし娘
第 22 回（平成 30 年度）	レツゴー三匹、三遊亭小円・木村栄子

第 23 回（令和元年度）	笑福亭松之助、Ｗヤング
第 24 回（令和２年度）	ゼンジー北京
第 25 回（令和３年度）	笑福亭仁鶴、初代真山一郎
第 26 回（令和４年度）	桂吉朝、今いくよ・くるよ

※平成 8 年度～令和 4 年度：63 組 100 名

「浪花二〇カまち請角力」について

荻田　清
（資料整理・活用部会長）
（梅花女子大学名誉教授）

本資料は、令和三年に上方演芸資料館が購入したものである。府直営となって以降も重要資料の補充は、微々たるものながら続けている。

二〇カは、残念ながら大阪では耳遠いものになってしまった、といわざるをえない。簡単にいうと「江戸時代の中頃、夏祭りの夜、素人の余興として行われた滑稽寸劇が、やがて演劇化して専門家が出現、興行として上演されるようになった。明治以降、近代化されて、曽我廼家の喜劇へと発展し、松竹新喜劇・吉本新喜劇などにつながっていく。漫才や落語など、上方の笑いの芸能に多くの影響も与えたが、それ自身は衰退していった」。なお、二〇カの表記は種々あるが、即興を意味する「俄か」が語源であるところから、基本的には「俄」の文字を使用する。

本資料は、俄がまだはっきり興行化していない時代のもの（宴席などに呼ばれることは多かったらしい）。素人の芸能として、市内あちこちの町内に「谷」と呼ばれる集団が組織され、その技芸を競い合っていた天保二年(1831)、優秀な人を相撲の番付に見立てランクづけしたものである。

〔図版１　上方演芸資料館蔵〕

大きさは縦４９・０糎×横３４．５糎。今日よく見かける縦型（江戸風）の相撲番付に倣った典型的な見立番付である（※１）。わざわざ縦型と断ったのは、江戸時代上方の相撲番付は、横型が普通だったからである。最上段には「浪花二〇カまち請角力」と題が記される。「まち請」の意味はここでは「町が抱えている、町の専属」といった意味であろうか。町を流

し歩く俄を「待ち受ける」意味をこめているかもしれない。

右の欄外には、「天保二年(1831)卯之年大新板」、下に「南舟(南船場)　袖岡」「南舟　彫丸」とある。見立番付では制作者などが記される位置であり、南船場の袖岡と彫丸がこの番付制作に関わっていることを示していると思われる。袖岡は有名な人で、この見立番付の十九年前に当たる文化九年(1812)六月の「俄大角力見立」(『上方演芸辞典』所収)では、「南舟」ではなく「島の内」ながら東大関に位置していた（※２）。左の欄外には「右にもれたる衆中は追々差加へ後篇に出す　　千鶴萬亀　叶　　板元浪花」。一般的に見立番付は、編集者の主観が大きく入るもので、常に苦情が出ることを想定して、このような但し書きが付く。「板元浪花」という表現は珍しい。板元名を明記しないのは、見立番付ではごく普通に見られるが、「浪花」とわざわざ断ったところを見ると、大阪以外の土地の人々にも見てもらいたいという意図が感じられる。普通「千秋萬歳」とあるべきところを「千鶴萬亀」としたのは、俄らしい洒落であろう。

以下、中央部分と最上段の翻刻を記す(二段目以降は文末)。漢字は常用漢字に直した。／は行移りを表す。下線は筆者。

【中央】

次第／不同　御免　行司　堂嶋　光浪／同　かぶ善／ざこば　かごと／なんば　ちん長／川西　寿楽／あはざ　八百喜／〃　いづ伊／〃　はつ吉　　勧進元　ほりへ　東寿軒／　差添人　中船　湯桶軒

【一段目】東之方

大関	北	村上
関脇	同	角井
小結	同	源平
前頭	ほりへ	の崎
前頭	北	南玉
前頭	ほりへ	ト七
前頭	南	音琴
前頭	北	五調
前頭	天満	俄楽
前頭	ほりへ	五梅
前頭	北	坂市
前頭	新北	新蝶

【一段目】西之方

大関	上町	淀川
関脇	中船	米丸
小結	南	大仏
前頭	上町	本虎
前頭	南	里清
前頭	同	魚萬
前頭	紅梅	岡芝
前頭	南	旭堂
前頭	上町	高木
前頭	中船	木魚
前頭	上町	ふくろ
前頭	中船	道楽

中央、行司の位置にある光浪とかぶ善(株善)は、引退した長老格の人。前出文化九年(1812)の「俄大角力見立」では西小結に株善、西前頭二枚目に光浪と出てきていた（※３）。その下の勧進元の堀江の東寿軒、差添人の中船場の湯桶軒は、重要な役割を荷っていると見られるが、他の資料を知らない。堀江・中船場の谷(俄のグループ)の世話役という立場の人物と思われる。

以下、この番付に出てくる人物で、他の資料にも登場する名前を、いくつか拾ってみよう。

嘉永元年(1848)秋成立の『古今二和歌集』付録(『日本庶民文化史料集成』第八巻所収)によれ

ば、東大関の村上は村上杜陵。甚蔵といい、爪長山人と号した。職業は表具師。当時の講釈師吉田天山について軍談も得意とし、書家としての名も高かった。古い俄を改めて、今風の俄に変えていった人。『風流俄天狗』半紙本五冊のりっぱな俄の本の編著者として、大きな名を残した。天保三年(1832)八月、五十五歳没、という。

西大関の淀川は倉椀家淀川。落語「三十石」で知られる枚方のくらわんか舟をもじった名。俄の作者として知られ、『風流俄天狗　二輯』(補訂)、写本の『古今二和歌集』、『座敷俄カ　智恵可曽家』など、江戸時代の俄を調べる際の貴重な資料を残してくれた。村上杜陵は『風流俄天狗』の序文で「後世恐るべし、上町に淀川といへる一見識」が出現したという。上方演芸資料館には『智恵可曽家』の初編が所蔵されている(図版２)。この本の三編はよく見かけ筆者も所持しているが、初編は珍しい（※４）。

西前頭筆頭の上町の本虎は中嶋氏、名は儀助。金鴈堂と号して、天神橋の南で本屋を営んでいた。若い頃、故人桂文治(初代)に師事し、落とし噺がうまかった。多くの遊芸に親しみ、特に俄を好んだ。倉椀家淀川とは竹馬の友で、作者として能力を発揮し、「近代作者の仙」と称された。天保十三年(1842)九月九日没、五十九歳という。

〔図版２　『智恵可曽家』初編表紙（上方演芸資料館蔵)〕

西前頭三枚目の魚萬は、亀水亭魚萬。『忠臣蔵俄噺』(天保十五年〔1844〕)という本を残している。

既に述べたように、この番付の翌年、天保三年(1832)には『風流俄天狗』半紙本五巻五冊という、娯楽本としては立派な本が出版された。この本は当時三都に名高い歌舞伎役者・三代目中村歌右衛門が「十方計(とぼけ)梅玉」の名で序文を寄せていることで知られている。著者は村上杜陵。その第一巻の口絵に当時著名な俄師の姿が描かれている(図版３)。

浦川公左の描く絵は写実的な似顔絵ではないが、とぼけた味を出して雰囲気はよく伝えていると見る。番付に照らし合わすと、本を前に開いて思案している本虎は西前頭筆頭、その横に目鏡をかけて扇子で何か指示しているのが村上、

〔図版３〕『風流俄天狗』（筆者所蔵）

後ろで刀（俄の小道具）を提げて立っている南玉（なんぎょく）は東前頭二枚目、本を持って頭を掻いている角井（かどい）は東関脇、扇子を開いて横を向いている淀川は西大関、淀川を見下ろしている源平（げんぺい）は東小結に見られる。見立番付と同時期の図柄であることがはっきりわかる。

天保十二年(1841)に出版された『風流俄天狗二輯』五巻五冊は、村上の後を受けて、本虎の作を補訂して淀川が編纂したもの。ここにも巻一の口絵に俄師の絵が載る(図版４・５)。俄師の名は明記されていないが、袖の紋の字と衣装の中に隠された文字をたどっていくと、名前がわかるようになっている。

図版４の右の二人は、すでに出てきた淀川と本虎。左に立っているのが新蝶。裾に蝶が飛んでいる。新蝶はこの番付では東前頭一段目の端に出てくる。その下、女形を演じているのが南玉。

図版５の右は、後にめざましい活躍をする三貴。天保二年のこの番付では、まだ西方二段目前頭(今日の相撲番付では十両・幕下に相当)の七枚目に甘んじている。左側に立っている人物が、袖に「音」、帯に「コト」とあって、音琴。東前頭四枚目に出ている。左端に座る女形は、袖の紋が〇に市で、市丸。市丸も番付の西方二段目前頭十枚目に出ていた。この市丸は、「市」と「一」の音が通うところから、『一トロ俄二輯』(嘉永三年〔1850〕)などの俄の種本（※５）に名を見せる十方舎一丸と同一人かと思われる。

〔図版４〕『風流俄天狗二輯』（筆者所蔵）

〔図版５〕『風流俄天狗二輯』（筆者所蔵）

やや下って、弘化五年(＝嘉永元年、1848)の『風流俄選』（初代桂文治の弟子の月亭生瀬著、大阪府立中之島図書館蔵)の巻一の口絵にも、俄師の姿が二丁にわたって描かれている（図省略)。新蝶・南玉・角万・三貴・ねごと・市丸。俄師の名前には読みのわからない人が多いが、ここで「ねごと」と仮名で出てきたことにより、音琴の読みが判明する。

江戸時代後期から明治初頭にかけて、大阪で大活躍した浮世絵師・初代長谷川貞信は、俄師を描いた錦絵を残している(『初代長谷川貞信版画作品一覧』松平進編、和泉書院、1997 年)。南玉・三貴・音琴・新蝶が廓の太夫に扮した姿で、中に細かい字でそれぞれ俄が一題ずつ記されている。弘化・嘉永の時期の作かと思われる。錦絵に描かれるほどに、俄師の人気は高まっていた。その他、詳しくは今省略するが、この頃は比較的資料の残されている時期であり、天保二年のこの見立番付の価値が確かめられたといえよう。貴重な一枚である。ただ、よく見ると版面にむらがあり、埋め木で修正した跡の見られるのが惜しまれる。

この頃の俄師が一座を組織し、やがて江戸に出かけるなどの活動を広め、急速にプロ化してい

った。繰り返しになるが、明治に入り、小屋での興行俄が盛んとなり、新聞俄、改良俄などとも呼ばれ、そこから曽我廼家の新喜劇も生まれていくのである。

※１、同じ形式の大阪俄の見立番付には、文化九年(1812)六月「俄大角力見立」、天保三年(1832)「浪花風流二〇〇カ相撲」、嘉永七年正月(1854)「俄角力見立」が知られている。
※２、袖岡は天保三年五月には亡くなっている。『風流俄天狗』（天保三年仲夏の村上杜陵の序文）には「廿歳のころより半也、為五郎の群となりて　北にて泉吉、南にては弁連、袖岡抔と並びて座敷俄をせし事しば/＼なりしに、此輩皆々故人となり……」。
※３、『風流俄天狗』序文、上記の文に続いて「旧友には北に株善・泉木・光浪・芦橋抔今に壮んなれど此業を止られ」とある。
※４、中本(縦１７・８糎×横１２・３糎)一冊。厚紙表紙、題簽題「座敷／俄カ　智恵可曽家　上」。袋綴じ十三丁。末尾欠。内、序文二丁、凡例二丁。目次半丁には「うつり気、時の勢ひ、しら浪、加茂川の月、羽根なき矢、紀州街道、放し鳥、かゝり火、うぬぼれ、掛鯛」の十題が書かれているが、本文は「しら浪」の途中まで。見返しは藍刷りで「倉椀家淀川著述／浦川公左画図」「文金堂梓」「座鋪／俄カ　智恵可曽家　全」。内題は「座敷／庭歌　智恵可曽嘉」。
※５、この種の俄の種本については「幕末明治初期俄の種本」（宮田繁幸・荻田清、『藝能懇話』三号など）を参照されたい。

最後に「浪花二〇〇カまち請角力」の二段目から五段目の翻刻を付録として記す。この中で、最下段東方世話人のはじめに「しん町　文治」とある。落語家の初代桂文治は、本虎や生瀬の師匠であるが、この当時は故人であり、連名には「八」を名乗る人が多く、幇間の一群かと思っている。

なお、本稿は、前田勇編『上方演芸辞典』、肥田晧三著『上方風雅信』の「大阪の俄」、『中村幸彦著述集　第十巻』「大阪俄について」から、多く学ばせていただいたことを断っておく。

【東二段目】
前頭 堀へ 丁士
同 上丁 手枕
同 川西 歌楽
同 ほりへ 七五三
同 紅梅 儀楽
同 川西 茶釜
同 ほりへ シケ
同 川西 歌蝶
同 ほりへ 吐梅
同 南舟 福山
同 むすふ 友岡
同 〃 亀丸
同 川西 丸矢
同 むすぶ 南龍
同 かくら 団子
同 〃 南虎
同 南舟 千成
同 南舟 子袖

【西二段目】
前頭 南 来玉
同 新北 亀楽
同 中船 大義
同 南 平丸
同 上町 千田
同 紅梅 □楽
同 南 三貴
同 いさみ 我楽
同 中船 鼈甲
同 中船 市丸
同 むすぶ 歌門
同 新地 鬼木
同 同 南徳
同 花月 三子
同 いさみ 虎丸
同 九条 三月
同 花月 丸鳥
同 かぐら 梅岡

【東三段目】
前頭 川西 初楽
同 ほりへ 杉山
同 かぐら 花林
同 南舟 五斗
同 川西 花蝶
同 かぐら 政丸
同 〃 延紅
同 安治川 山市
同 〃 新田
同 南船 金子
同 〃 永靏
同 〃 七夕子
同 川西 里水
同 〃 平楽
同 〃 萬蝶
同 ほりへ 文虎
同 〃 いろは
同 〃 じ○
同 〃 四海
同 〃 梅園
同 〃 立浪

【西三段目】
前頭 南五 イ山
同 南 梅竹
同 新北 萬玉
同 花月 蝶丸
同 中船 魚丸
同 〃 一士
同 いさみ 田丸
同 〃 天亀
同 〃 上卯
同 中船 更紗
同 花月 丸泉
同 南 新子
同 花月 布袋
同 〃 成寅
同 むすぶ 友浪
同 〃 居京
同 〃 鬼木
同 南 南尾
同 〃 来丸事 南甚
同 〃 里枕
同 いさみ 豆大

【東四段目】
前頭 川西 大卯
同 〃 ト丁
同 〃 丸岡
同 かくら 井蝶
同 ほりへ 由浪
同 〃 宗石
同 〃 鳥安
同 天満 ト木
同 川西 鬼木
同 かぐら 二呂
同 ほりへ 太子丸
同 〃 鹿油
同 〃 の田
同 〃 亀甲
同 〃 ト楽
同 川西 寺丸
同 〃 じ○
同 なんば 士丸
同 川西 順斎
同 なんば 所助
同 川西 八百丸

【西四段目】
前頭 花月 梅王
同 〃 市寅
同 むすふ 亀勇
同 新北 あらかし
同 〃 片丸
同 中船 久楽
同 南 一声
同 中船 歌キ
同 〃 我楽
同 〃 馬笑
同 南 里勇
同 〃 里光
同 〃 来雀
同 〃 来竹
同 いさみ さか月
同 〃 唐孝
同 中船 染竹
同 〃 カニ丸
同 〃 文丸
同 〃 南辰
同 新北 魚万
同 〃 ぬし藤
同 〃 南高

【東五段目】
世話人
しん町 文治
ほりへ 音八
〃 菊八
〃 鯛吉
しん町 名八
ほりへ 松八
千日まへ 九二吉
〃 此吉
〃 宗八
〃 折八
〃 来八

頭取
堂嶋 加賀虎
あはざ 喜木
天満 寿枝
川西 土鍋

【西五段目】
頭取
堂しま 毛摩仁
中船 家根善
天満 歳賀
川西 ト石

世話人
北しんち 岩八
東店 関八
〃 勝助
西店 力蔵
〃 柳吉
北新宅（ママ） 珍八
〃 政八
ばゝ先 玉八
東店 秀八
西店 片八
〃 種八

〔「浪花ニ⚭カまち請角力」二段目以下の翻刻〕

収蔵資料の紹介

砂川捨丸の「不如帰」

大西　秀紀
（資料整理・活用部会委員）
（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）

明治・大正・昭和と三つの時代にわたって活躍した漫才師[1]砂川捨丸(1890-1971)は、その生涯に260枚を超えるSPレコードを残した[2]。これは同時期にレコードを残した東西の漫才師達の誰もが遠く及ばない数である。捨丸の芸風はいわゆる「芸尽くし漫才」と呼ばれるスタイルで、唄や踊りや楽器演奏などを見せることがネタの中心になっている。その内容は端歌、俗曲や流行(はやり)唄、書生節などの音曲は言うに及ばず、当時巷間で流行っていた面白そうな事はほぼ網羅しているのではないかと思わせるほどの多彩さである[3]。本稿では当館所蔵のSPレコードの中から、捨丸の「不如帰」をご紹介したい。

「不如帰」は徳冨蘆花作の家庭小説である。明治31年（1898)11月から翌年5月にわたって『国民新聞』に連載され大評判となり[4]、数年後には戯曲に脚色され、以後脚本や演者を変えながら新派悲劇の代表的な演目となった。この浪子と武男の物語は演劇だけにとどまらず、浪花節や漫才などさまざまな芸能でも取り上げられた。この捨丸のレコードはのぞきからくり版の「不如帰」をネタにしたものである。

のぞきからくり（覗機関）は街頭演芸のひとつで、江戸ではからくり、関西ではのぞきと略して言うとされる。このレコードの冒頭で捨丸は「のぞきを一つやらせて貰います」と言っている。縁日などの人の集まるところで、図１のような飾り立てで、左右の者が俗に「のぞき節（からくり節とも)」と呼ばれる口上唄で画面の解説をする。観客は下段のレンズを通して、箱の中の絵をのぞいて見るのである。絵はひもで引きあげて順次に替える。外部の看板絵は、観音開きとなり二度だけ替える。昭和20年（1945）ごろから演技者が

図１　のぞきからくり
（『大阪ことば事典』[6]より転載）

少なくなり現在ではほとんどみかけなくなったという。演目は、江戸時代から「八百屋お七」「お染久松」「お半長右衛門」「石川五右衛門」「刈萱石童丸」「女賊三島のお仙」「忠臣蔵」「鈴木主水」などが行われていたが、明治時代には「不如帰」「己が罪」「五寸釘寅吉」や、日清・日露の戦記ものなどが加わり、継子いじめ、「鬼熊退治」といった新聞種は大正時代に、昭和にはいっては「肉弾三勇士」などに人気があった[(5)]。現代ではほぼ消え去ったといえる芸能だが、上方落語の「くっしゃみ講釈」の主人公が、八百屋の店先で唄う「八百屋お七」ののぞき節で覚えている人も多いのではないだろうか。

「不如帰（上）」　砂川捨丸　ニッポノホン 4371　大正 10 年 8 月新譜（書誌番号：35734）

録音された詞章は次の通りである。紙幅の都合で掛合を改行せずに記したため、読みにくい点はご容赦願いたい。

【詞章】

「のぞきを一つやらせて貰います」「ヨウ／＼」「〽三府の一の東京で、波に漂う丈夫(ますらお)が」「ア、ドッコイ」「〽儚い恋にさまよいし、父は陸軍ちゅうじあうで」「チョット待った／＼」「何や」「ちうじあうてなことを言いますか？」「仮名で書いたら中将と書くのにちうじあう」「アンタ本字を知りなはらんか？」「本字は知りまへなんだんや」「知らんことおますかいナ」「精進料理でも仮名で書いたらしやうじんりやうりと書く」「日が暮れてまうがナそんなこと言うとったら」「アアさよか」「父は陸軍中将」「〽父は陸軍中将で」「ア、ドシタ」「〽片岡子爵の長女で」「ア、ドッコイ」「〽桜の花の蕾かけ」「ア、ドッコイ･･･違う／＼／＼、開きかけと違うの？」「開きかけは蕾やがナ」「アホなこと言うてないナ」「〽桜の花の開きかけ」「ア、ドシタ」「〽人もうらやむ器量好し、その名も片岡浪子嬢」「ア、オー」「片岡の浪子」「不如帰の浪子」「あれが前のワタイの家内」「アホなこと言いなはんナ、厚かましい」「ハッハ、〽海軍少尉男爵の」「ア、ドシタ」「〽川島武男の嫁はんになり」「そんなもっさりした事がおますかいナ」「アさよか、奥さんですか？」「違う」「ハハーン、そうすると嬶？」「嬶てなことがおますかいナ」「アッ、ワイフになる」「ワイフとは？」「英語で言うと嫁はんの事をワイフ」「ハァー、夫のことは？」「アァ、サイフ」「アホなこと言いなはんナ」「アさよか」「妻となる」「〽妻となる」「ハイ」「〽新婚旅行をいたされて」「ハイ」「〽伊香保の山のわらび狩」「ア、ドシタ」「〽遊び疲れてもろともに、その夜に我が家へ帰られる」「アオーッ」「〽アーッ、武男は軍籍あるゆえに」「ア、ヨイショ」「〽やがて征くべき時は来ぬ」「ア、ドシタ」「〽逗子をさして急がるる」「ハ

イ」「〽浜辺の波はおだやかに」「ア、ドッコイ」「〽武男がボートに移るとき」「ハイ」「〽浪チャンタラギッチョンチョンでパイノパイノパイ」「チョット／＼／＼」「ハァ？」「何を言うてなはんネ、アンタ」「何です？」「急に不如帰に浪チャンタラギッチョンチョンてな事がおますかいナ」「どこで間違うたんやろ」「もう一ぺんやってみなはれ」「〽アーッ、武男がボートに移るとき」「ハイ」「〽浪チャンタラギッチョンチョン･･･ア、アッ」「それがいかんねんがナ、アンタが浪チャンタラて言うさかい、ギッチョンチョンが付くんや」「ハァ、ギッチョンチョンだけまけてまんねン」「いかん／＼、浪子は白きハンカチを」「アッなるほど、〽浪子は白きハンカチを」「そうそう」「〽打ち振りながらネェあなた」「ハイ」「アア浪さんですか」「ハイ」「伊香保の山のわらび狩、さぞ貴女はくたびれたでしょうね」「ネェ武男さん」「ハァイ」「今日は婆やがネ、あんまり面白いことばっかり言うてくれたんですもの、私こんな愉快なことはありませんのよ」「何抜かしゃがんネン」「アホなこと言いなはんナ」「アアさよか、しかしながら浪さん、貴女の病気も今では肺炎になりましたね、浪さん」「ネェ武男さん」「ハイ」「私の病気は治るんでしょうかネ」「サァどうだっしゃろなァ」「アホなこと言てなはんナ」「ハハァ、治りますとも、川島武男の･･･（以下聞き取れず）」「ネェ武男さん」「ハァイ」「私死んでも貴男のの妻ですわネェ」「私死んでは嫌ですわネェ」「アホなことばっかり言うてなはんナ」「ハッハッハァ」

このレコードは捨丸が初めてレコーディングをした日本蓄音器商会（ニッポノホン）での７枚の内の１枚である[7]（図２）。表裏とも同じタイトルだが「不如帰」は表面のみで、裏面は捨丸の洋行の話題に続いて都々逸の披露になる。相方の名はレーベルに記載されていない。

図２　砂川捨丸「不如帰」
ニッポノホン 4371（当館所蔵）

詞章からも分かるとおり、捨丸が「不如帰」ののぞき節を唄いながら、ところどころを言い間違えるボケに対して相方がツッコみながら漫才は進む。後半はのぞき節から離れ、武男と浪子の台詞のやりとりとなるが、「不如帰」の物語を熟知している当時の観客には十分受けたと思われる。

のぞき節はかつては広く知られた唄で、数は決して多くはないがレコード化されたものもあり、当館も「不如帰[8]」（図３）、「須磨の仇浪[9]」の２枚を所蔵している。この黒田四郎太郎の

「不如帰」と捨丸盤を比べると、前記【詞章】の下線を付した部分が、黒田盤ののぞき節とほぼ一致しているのが興味深い。大正 10 年（1921）録音の捨丸盤に対し、黒田盤は昭和 5-6 年（1930-31）頃のマイクロホン録音で時代は 10 年ほど下るが、ここはやはりのぞきからくりの演目として定着していた「不如帰」の詞章や節を、捨丸が漫才のネタとして採り入れたと考えるべきだろう。こののぞき節に限らず、捨丸は当時巷間にあったさまざまな芸能をネタに採り入れレコードに残している。「漫才は万人の物真似」という捨丸の言葉通り、それらはあくまでも捨丸流だが、我々は捨丸のレコードからいにしえの芸能や風俗を偲ぶことが出来るのである。

図３　「のぞきからくり 不如帰」
キリン K.871-A（当館所蔵）

注

1　「まんざい」という芸能の表記は時代によって異なり、捨丸の芸についても「萬歳」「万歳」「漫才」といった表記がそれぞれ使われてきたが、本稿では「漫才」の表記に統一する。

2　岡田則夫「砂川捨丸のレコード」『レコード･コレクターズ　11 月号』ミュージックマガジン社、通巻第 2 巻第 4 号、1983、p.56-69

3　大西秀紀「砂川捨丸の SP レコード―府立上方演芸資料館所蔵盤について」『令和 2 年度 年報』大阪府立上方演芸資料館、2021、pp.21-27

4　『演劇百科事典　第 5 巻』平凡社、1961、pp.188-9

5　『演劇百科事典　第 4 巻』平凡社、1961、pp.404-5

6　牧村史陽編『大阪ことば事典』講談社学術文庫、1984, p.548

7　吉田留三郎『まんざい風雲録』九藝出版、1978、p.149-154

8　「のぞきからくり　不如帰」黒田四郎太郎、寺川徳子、キリン K.871（書誌番号：55331）

9　「のぞきからくり　須磨の仇浪」黒田四郎五郎、寺川徳子、キリン K.931（書誌番号：23180）

演芸人の衣装と年齢や享年の数え方について

大西　律子（上方演芸資料館学芸員）

常設展示の展示替え案を作成するにあたり、収蔵資料やその資料にかかわりのある演者について調査を行っていたところ、同じ出来事であっても文献によって年代に違いがあった。同じ出来事ならば、それがあった年はどの文献でも同じであろうはずなのに、異なっているのである。

この違いは、弟子入りや初舞台といった演芸人の転換点となる出来事や、その出来事があった演芸人の年齢で見られた。また、文献による年代の差は１年ほどのものから数年にわたるものまであった。さらには、享年を数え年でなく満年齢で数えていると思われる事例もあった。

そのため年代を確定しようと別の文献を追加して調査を続けたところ、その文献には先に使ったどの資料とも異なる年代が載っている…と次々に別説が見つかるという事態が起こった。年代を絞り込むために調べたはずが、文献にあたるごとにさまざまな年代が現れ、一体どの説を採用するのがよいのか、頭を抱えることになってしまった。

そこで、上方の演芸人が掲載されている人名事典や名鑑等 13 点の凡例を確認し、年齢や享年の数え方について考えてみることにした。次に示すのは、それらをひとつにまとめた表である。なお、凡例の明記がない書籍についても、凡例に準じる記載があるものに関しては凡例とみなしている。

	書　名	発行年		生年の記載	没年の記載	年齢や享年の算出		備　考
		和暦	西暦			数え年	満年齢	
1	浪花演芸名家談叢	明治42	1909	生年(月日)	－	―	―	生年のみ・生年月日が混在、没年の記載はなし
2	上方演芸辞典	昭和41	1966	生年のみ	没年月日	○	×	凡例に「人物の年齢は古記録に同調して数え年とする」とある
3	現代上方演芸人名鑑	昭和55	1980	生年のみ	没年のみ	○	×	
4	現代上方落語人録	昭和56	1981	生年のみ	－	―	―	付録(p.262-267)に生年が記載されている
5	新現代上方落語人録	昭和60	1985	生年月日	－	―	―	
6	古今東西落語家事典	平成元	1989	生年月日	没年月日	○	○	
7	日本芸能人名事典	平成７	1995	生年月日	没年月日	○	○	
8	お笑いタレント辞典～若手大集合～	平成８	1996	生年月日	没年月日	○	○	
9	大阪人物事典	平成12	2000	生年のみ	没年月日	○	○	生年と没年月日は判明している範囲で記載
10	新選芸能人物事典 明治～平成	平成22	2010	生年月日	没年月日	○	○	
11	日本人物レファレンス事典 芸能編 1 映画・演劇・タレント	平成26	2014	生年月日	没年月日	○	○	
12	日本人物レファレンス事典 芸能編 2 伝統芸能	平成26	2014	生年月日	没年月日	○	○	
13	大阪府人物・人材情報リスト 2023 第１巻	令和４	2022	生年月日	没年月日	○	○	

まず、表の左端にある「書名」は発行年の古いものから順に並べた。次に、その右側にある「生年の記載」・「没年の記載」欄は各文献に掲載されている生没の時期がどう記載されているかを示す欄とした。生没時期の情報が年のみの場合は“生年のみ”・“没年のみ”、月・日まで記載のある場合は“生年月日”・“没年月日”としている。また、「年齢や享年の算出・数え年」「年齢や享年の算出・満年齢」の欄は各文献の記載情報から年齢・享年を数え年や満年齢で算出できるかどうかを示した。割り出せる場合には“〇”、割り出せない場合は“×”とした。

次に、この表から演芸人の年齢と享年の数え方について考えてみたい。

年齢の数え方には満年齢と数え年がある。広辞苑によると、満年齢とは「誕生日ごとに１歳ふえる年齢の数え方。また、それで数えた年齢」とある。また、数え年は「生まれた年を１歳とし、以後正月になると１歳を加えて数える年齢」で、享年は「(天から享(う)けた年の意)死んだ者がこの世に生きていた年数。死んだ時の年齢。行年」とある。

現在では、年齢というと満年齢と認識している人が多く、数え年の年齢を使う機会は少ない。数え年の年齢を使うのは、七五三・長寿祝い・厄年といった昔から続くしきたりや行事にかかわる機会くらいであろうか。数え年の考え方は今でもあるものの、日常多くの場面で使われるのは満年齢である。

しかし、年齢はかつて数え年で数えられていた。明治時代には法律により年齢を満年齢で数えると決められたものの、人々は慣れ親しんだ数え年で年齢を数えていたそうである。戦後になると、年齢は満年齢で数えることが定められ、満年齢の数え方が一般的になった。また、享年もその言葉の意味(「天から享(う)けた年」)から数え年で数えるのが通例とされてきたが、現在は享年を満年齢とする説もあるとのことである。つまり、現在は年齢や享年の数え方には複数の考え方があることになる。

それでは、演芸人の年齢や享年は数え年と満年齢のどちらで数えるとよいのだろうか。

先に述べたように、数え年の考えでは誰もが正月を迎えるごとに一つ年齢を重ねるため、生年が分かれば年齢が算出できる。また享年も、数え年で考えるときは生年と没年が分かれば簡単に割り出すことができる。対して、満年齢は年齢を加える起点が誕生日であることから、年齢を割り出すためには生まれた年・月・日が必要であり、享年を満年齢で算出するには亡くなった年に加えて月・日も必要になってくる。

今回、凡例を確認した文献は生年月日と没年月日の両方が記されているケースが多かった。ただ、そのなかでも演者により生年または没年のみしか記載のない場合や、生年(または没年)不詳となっていることもある。

これは、今回確認した文献が比較的新しいものが多かったからではないかと考えられる。また、発行年と生没情報の詳しさは正比例しているわけでないが、文献の発行年が古いほど生没年月日に関する情報も少なくなる傾向があるように思われる。それは、かつては数え年の考え方が今よりもずっと身近にあり、生没の月・日はあまり必要としていなかったからなのか、演芸人の生没に関する情報が現代ほど明確に残されていなかったからなのか、理由としてはいくつか考えられるものの、推測の域を出ない。

そして、年齢や享年の数え方について数え年・満年齢の定義や人物辞典等の凡例をあわせて考えまとめると、次のようになる。

① 年齢・享年＝数え年とすると、生年・没年のみからでも年齢を計算することができる。

② 年齢・享年＝満年齢とすると、年齢を割り出すには生年月日と没年月日が必要となる。

③ 満年齢で年齢を数えることが定着するのは戦後以降、それ以前は数え年で数えられていた(昔の人は、自分の年齢を数え年で数えていた)。

④ 文献の発行年が古いほど、演者の生没時期は年表記のみになっていることが多い。

上の４点からすると、生年が戦前の演芸人に関しては、年齢や享年の算出のしやすさ・検証可能な資料の多さの面から数え年で数えるほうがよいかもしれない。

ここまでのことを総合して考えると、現在の慣例とはなじみが薄くなるものの、検証に使える資料の幅を広げるということ、上方で活躍した演芸人は明治以前にも存在することなどを考慮して、年齢や享年については数え年で数えるのがよいように思われる。しかし、現在活躍されている方々の年齢の数え方をはじめ、今後の課題も残されている。また、今回は検証対象の資料を上方の演芸人が掲載されている人名事典等としたため、ひき続き、他ジャンルの人名事典等も含めて調査・検証を続けたいと考えている。

最後に、演芸人の年齢や享年の数え方について考えるきっかけとなった当館の収蔵資料を２点紹介したい。

(１)落語家・二代目 桂春団治の法被(資料コード：00409888)

衿に「桂春団治」の名前が入った経絽(堅絽)の法被。この法被にある紋は、春団治の定紋「菱三升の中に花菱」のように見えるが、中の「花菱」は「花菱胡蝶」になっている。こちらの法被は、平成８(1996)年に二代目 桂春団治師のご遺族より寄贈された。

【前】

【後】

【紋部分拡大】

（２）浪曲師・冨士月子の着物（資料コード：00157461）

青い花柄の総レース地が華やかで豪華な着物。裏地には光沢のあるシャンパンゴールドの生地が使われ、総レースの花柄が引き立つように仕立てられている。また、褄下（衿下）のスカラップは舞台姿がより華やかになるように工夫されたものと思われる。こちらの着物は、平成８（1996）年に冨士月子師のご遺族より寄贈された。

（※この着物は令和５年度下半期企画展示「What is 上方演芸？」の展示資料でもあり、令和６年３月３日（日）まで当館にて実物をご覧いただけます）

【褄下のスカラップ部分拡大】

今回の検証については当館資料整理・活用部会の荻田部会長と大西委員にご指導いただきました。心より御礼申しあげます。

＜参考文献＞

村上薫編『浪速演芸名家談叢』、演芸社、1909 年
前田勇編『上方演芸辞典』、東京堂出版、1966 年
相羽秋夫『現代上方演芸人名鑑』、少年社、1980 年
相羽秋夫『現代上方落語人録』、弘文出版、1981 年
相羽秋夫『新現代上方落語人録』、弘文出版、1985 年
諸芸懇話会・大阪芸能懇話会編『古今東西落語家事典』、平凡社、1989 年
倉田喜弘・難波隆之編『日本芸能人名事典』、三省堂、1995 年
掛尾良夫編『お笑いタレント事典～若手大集合～』、キネマ旬報社、1996 年
三善貞司編『大阪人物辞典』、清文堂出版、2000 年
日外アソシエーツ編『新選芸能人物辞典 明治～平成』、日外アソシエーツ、2010 年
日外アソシエーツ編『日本人物レファレンス事典 芸能篇 Ⅰ映画・演劇・タレント』、日外

アソシエーツ、2014 年
日外アソシエーツ編『日本人物レファレンス事典 芸能篇 Ⅱ伝統芸能』、日外アソシエーツ、2014 年
日外アソシエーツ編『大阪府人物・人材情報リスト 2023 第１巻』、日外アソシエーツ、2022 年

収蔵資料の紹介（資料整理の現場から）

『九里丸置土産 笑根系図』アンケート用紙『笑魂系図回答綴』の紹介

島田　智子（上方演芸資料館司書）

大正から昭和初期に漫談や珍芸で活躍した花月亭九里丸の功績のひとつに、演芸人へのアンケートをもとに作成した『九里丸置土産　笑根系図』（以下、『笑根系図』）がある。それぞれの一門の師弟関係や以前の芸名等を確認することができる資料で、その「凡例」の最初の項には次のように記されている。

一、この「九里丸置土産　笑根系図』は昭和三十五年（一九六〇）八月、大阪京都兵庫の二府一県下を根拠に活動されている漫才、落語、奇術、曲技、曲芸、講談、司会、漫談、腹話術その他の色物を職業としている四百四十二人を基準にアンケートして、その回答によつて編集したものであります。なかには締切期限切迫しても回答のない人には再三辞を低うして懇請してさえ尚梨の礫のヅボラな分四人はオミツトしてしまいました。

本稿で紹介するのは、このアンケート回答の綴りである。

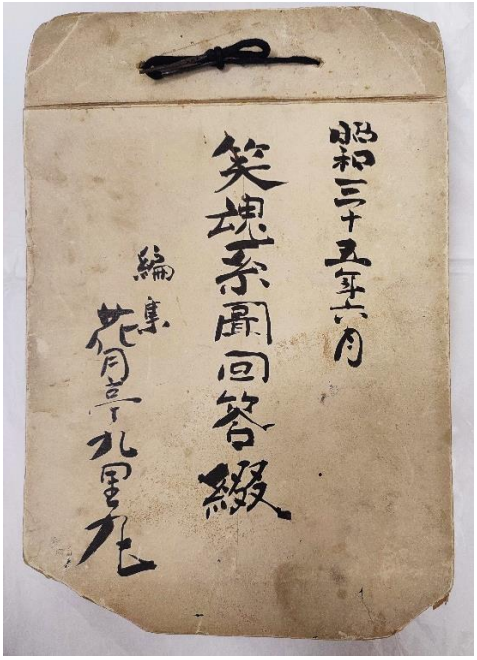
『笑魂系図回答綴』

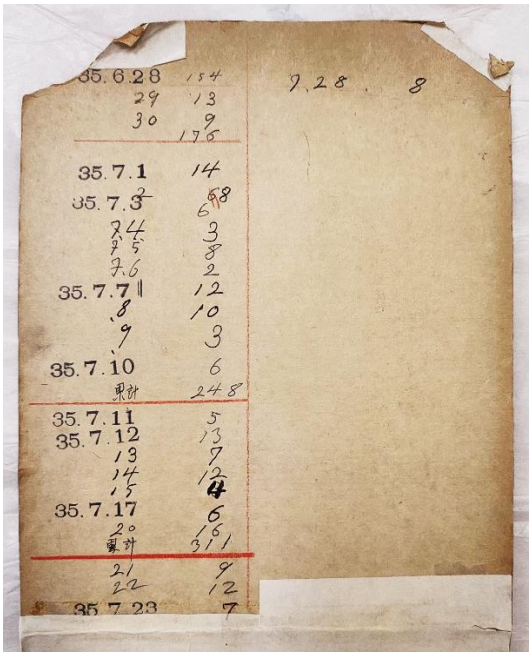
〔表紙・裏表紙〕厚紙　大きさ　281×191㎜　欠損あり

〔回答用紙〕368 枚　大きさ　239㎜×170㎜（横の長さは右側の「切りとり線」までを計測）

〔回答用紙以外のメモ〕４枚（うち１枚は原稿用紙を切ったもの）

〔資料コード 00662981〕（協力：松竹株式会社）





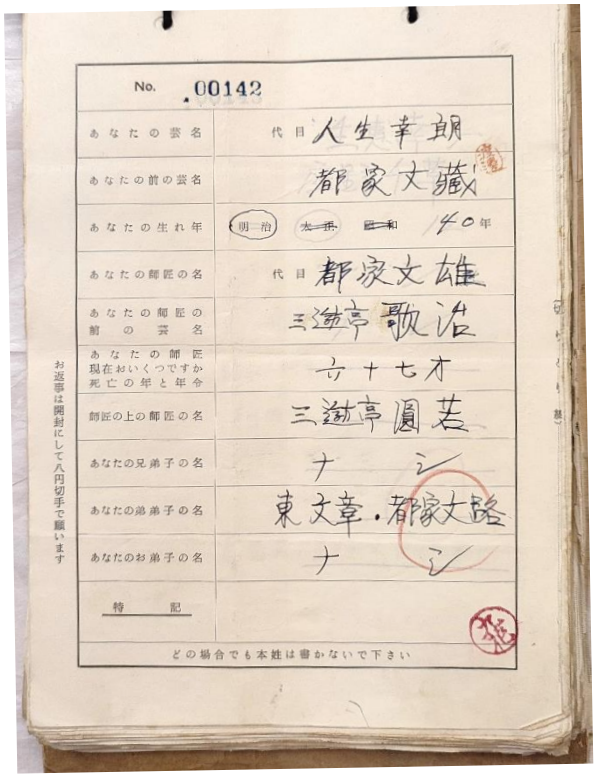
〔左：表紙　右：表紙の裏〕

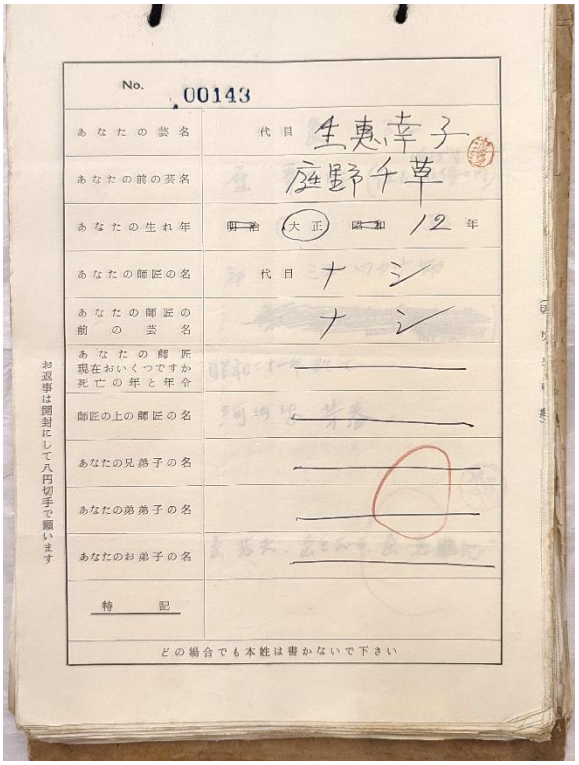
表紙には墨字で「昭和三十五年六月　笑魂系図回答綴　編集花月亭九里丸」とある。「笑『根』系図」ではなく「笑『魂』系図」となっている。書かれた時期は不明であるが、表紙の裏に回収した日付と枚数と思われる押印と書込みがあることから、少なくとも表紙の裏は回収と同時並行で記録されたものと推察される。

日付の記録は「35.6.28」(昭和 35 年 6 月 28 日であろう)の日付印から始まり、手書きの「7.28」で終わっている。ただし、綴られている用紙のなかには欄外下部に「35.6.19」の日付印が押されているものが６枚ある（秋田Ａスケ、秋田Ｂスケ、五条家菊二、初代砂川捨丸、中村春代、京はる子の回答)。しかし、他の用紙には日付印が無く、これら６枚が最も早く回収（提出）されたとは断定できない。また、この６枚がまとまって綴じられているわけではないことから、後述する「No.」や綴ってある順番は回収順とは一致しないといえる。なお、コンビ、夫婦、師弟などは前後に綴じられていることが多く、そのなかには同一人物の手によるのではないかと思われる筆跡が見られる。

回収が遅かったと考えられるものでは、用紙の枠外右側に「此書受取りシ日時が八月一日午後でしたので失礼」と書込みがあり（小山慶司の回答)、少なくとも６月から８月にわたって配布、回収していたことがうかがえる。

用紙は上部に２箇所穴が開けられ、厚紙の表紙と裏表紙を付けて綴じられている。欄外上部に書き込まれた文字がこの穴によって一部欠落しているものがある（桂我太呂の回答）ことから、配布時に穴はなく、回収後、綴じるために開けたと思われる。なお、用紙の右側には「切りとり線」の文字と点線があるが、切りとられた部分は確認できていない。





〔アンケート回答の例　左：人生幸朗　右：生恵幸子〕

用紙の枠内最上段には「No.」欄があり、前ページの画像のように番号が押印されているもののほか、手書きされているもの、空欄のままのもの、の３通りあるが、欠番や重複も多い[1]。

番号欄のあとには設問が 10 項目並ぶ。内容を以下に示す。

あなたの芸名／あなたの前の芸名／あなたの生れ年／あなたの師匠の名／あなたの師匠の前の芸名／あなたの師匠現在おいくつですか　死亡の年と年令／師匠の上の師匠の名／あなたの兄弟子の名／あなたの弟弟子の名／あなたのお弟子の名

「あなたの芸名」と「あなたの師匠の名」欄には、何代目かを記入できるよう予め「代目」が印刷されており、「あなたの生れ年」欄は明治・大正・昭和から選べるようになっている。

他に「特記」の欄があり、最後に「どの場合でも本姓は書かないで下さい」との注意書きがある。枠外左側には「お返事は開封にして八円切手で願います」とある。

さらに、ほとんどの用紙に、整理の際に九里丸が加えたと思われる「渡邊」（九里丸の本姓）印や「九花」印、赤鉛筆によるマルやバツ、「？」の書込みなどがある[2]。 加えて、追加で問い合わせたのか、「特記」欄に「漫才をおやめになった年」、あるいは「漫才をやめられた年」、「漫才をおやめになった年も記入して下さい」等と書かれ、具体的に何年かが明記されている回答もある（橘家太郎「昭和 33 年」、花菱アチャコ「昭和 15 年」等）。

先に引用した『笑根系図』の凡例によると、用紙を配布したのは 442 人。そのうち４人は回答しなかったとのことで差し引き 438 名のはずだが、綴られている用紙は 368 枚で、70 名分足りない。また、表紙の裏の数字の合計は 347 となり、いずれとも一致しない。

綴りの末尾には所定の用紙以外に人名や系図が書かれたメモが４枚あり、回答から得られた情報を補うなどの目的でおこなった調査の記録や系図の下書きである可能性が考えられる[3]。

その他、回答には記入されているのに系図に載っていないものや、反対に、回答に書かれていないのに系図に掲載されている情報もある[4]。さらには、回答の記載と『笑根系図』とで芸名等が異なるものがあるので、その一部を紹介する。

回答と『笑根系図』の相違例

回答記載 No.	名前	項目	回答	『笑根系図』	備考
00126 （番号印）	高野 弘美 〔高ははしごだか〕	あなたの 前の芸名	吉野 珠世 〔吉は下が長い〕	吉野 珠美	
00131 （番号印）	市川改メ 四海 浪太郎	あなたの 前の芸名	歌舞伎時代 實川 八百吉	市川 八百吉	
00132 （番号印）	市川改メ 四海 浜治	あなたの 前の芸名	芝居時代 市村 文男	市川 文男	
00139 （番号印）	今 喜多代	あなたの 前の芸名	梅津 冨美子	梅沢 冨美子	

回答記載No.	名前	項目	回答	『笑根系図』	備考
00146（番号印）	昭和 なべ	あなたの師匠の名	曽我ノ家 五二郎	大朝家 五二郎	本人が師匠の現在の名前と前の名前の欄を取り違えて記入し、九里丸が「五二郎」を「五郎」と間違えたか。
		あなたの師匠の前の芸名	大朝家 五二郎	曽我廼家 五郎	
202（手書き）	堤 早苗	あなたの芸名	堤 早苗	辻 早苗	
00266（番号印）	山本 薫	あなたの芸名	山本 薫	山本 憲	№00264「山本美智男」の「あなたの兄弟子の名」に「千鳥家力春（現在 山本憲）とあるのと混同か。註（２）参照。
00343（番号印）	林家 染奴	あなたの芸名	林家 染奴	三代目 桂 小米朝	回答提出から『笑根系図』発行までの間に、染丸門下から米朝門下に移ったと考えられる。
		あなたの師匠の名	三代目 林家 染丸	三代目 桂 米朝	
00395（番号印）	二代目 松旭斎 天耕	あなたの前の芸名	本名を用いておつた。	金沢 天耕	

このように、演芸人自身が書いた回答には、『笑根系図』と一致しない情報や『笑根系図』に反映されていない情報が数多くある。上方演芸を調査研究される際は『笑魂系図回答綴』も活用していただけるよう願っている。

【註】

（１） 重複の例

「00260」一輪亭花蝶と松葉家喜久奴 双方の回答に押印

「(00)358」鉄砲光三郎の回答に「00358」と押印、富岡花子の回答には手書きで「358」

（２） バツが付けられているのは２名（山本薫と月丘まゆみの回答）

山本薫の「特記」欄には、「私等楽団系で歌謡シヨーを戦前ヨリやつておりまして現在でも漫才と言ふのでなく山本薫 月丘まゆみの歌踊リズムとしてやつておりますのでよろしく」と書かれている。

（３） 松鶴家千代若等の東京の住所や電話番号、浅田家朝日の没年月日や本名、千葉琴月を中心にした系図等。いずれも手書き。

（４） 例えば、「あなたの前の芸名」の項目について、京唄子は「京町歌子」、浅田家日佐丸嬢は「菊の家絹奴」と回答しているが、『笑根系図』には載せられていない。反対に、『笑根系図』の「啓介妻」や「ラツパ妻」という情報は、それぞれの回答には記載がない。他にも、回答に書かれていなくても『笑根系図』には夫婦や親子関係が記されているものが多い。

上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

【経　緯】

○　平成元年３月　故砂川捨丸氏の遺族から、氏が愛用された貴重な鼓を大阪府に寄贈

○　平成２年１月　貴重な資料の散逸を防ぎ、大阪が誇る文化遺産である「上方演芸の歴史」とともに後世に残していく必要があるとして、「上方演芸保存振興検討委員会」（会長：井上　宏　関西大学教授）を設置

○　平成４年３月　同委員会において「上方演芸保存振興事業基本構想」を取りまとめ、資料館の設置を提言

○　平成５年１２月　大阪府において、資料館の立地場所を大阪市中央区難波千日前に決定

○　平成６年７月　基本構想を受け、大阪府において資料館に関する基本計画を策定

○　平成８年３月　大阪府立上方演芸資料館条例を公布

○　同　　年　８月　3,000を上回る一般公募の中から資料館の愛称が「ワッハ上方」に決定

○　同　　年　11月　展示室、演芸ホール、演芸サロン・資料室、レッスンルームや収蔵庫等から構成される有料施設として、大阪府立上方演芸資料館がオープン

○　平成20年２月　大阪府が「財政非常事態」を宣言し、全ての事業、出資法人及び公の施設をゼロベースで見直すこととし、資料館もその対象となる

○　平成21年12月　「大阪府戦略本部会議」において、「資料館が今後も果たすべき役割は、資料の収集・保存、資料の活用（展示・ライブラリー）、レファレンスサービスであり、「公演」「育成」は民に委ねる」との方針を決定

○　平成22年12月　演芸ホールを廃止

○　平成25年１月　「大阪府戦略本部会議」において、「当面は、現地において、常設展示を縮小し、より効率的な運営を行い、無料での利用に供するとともに、巡回展示や大学との連携等による研究機能の充実など新たな展開を図る」との方針を決定

○　同　　年　４月　展示室・レッスンルームを廃止するとともに、入館を無料とする

○　平成26年７月　「大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会」が、資料館の今後の方向性について、「大阪独自の文化である上方演芸を後世に伝えていくことは大阪府の文化行政が担うべき役割の一つであり、現時点では、資料館がその仕事を果たすことが望ましい」と提言

○　平成27年４月　提言を踏まえ、資料の整理・活用を継続的かつ計画的に取り組めるよう、指定管理者による運営を改め、大阪府の直営による運営を開始

○　平成30年７月　収蔵庫を大阪府咲洲庁舎に移転

○　　同　年11月　多くの府民や観光客等が上方演芸に触れ、楽しみながら、その魅力を知ることができる「体験型」の事業を中心に企画・運営を実施するという方針に基づき、リニューアル工事に着手

○　平成31年４月　リニューアルオープン

【機能の推移】

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">開館～</td><td colspan="2">平成 23 年 4 月～
（縮小）</td><td colspan="2">平成 25 年 4 月～
（縮小・無料化）</td><td colspan="2">平成 31 年 4 月～
（全面リニューアル）</td></tr>
<tr><td>場所</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td><td>区分</td><td>面積（㎡）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">4
階</td><td>展示室</td><td>1,170.991</td><td rowspan="3">存置</td><td rowspan="3">同　左</td><td colspan="4" rowspan="3">廃　止
※1</td></tr>
<tr><td>演芸ﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ</td><td>150.0
（15 ブース）</td></tr>
<tr><td>小演芸場
［上方亭］
（有料）</td><td>98.44
（74 席）</td></tr>
<tr><td>5
階</td><td>演芸ホール
（有料）</td><td>1,484.34</td><td colspan="6">廃　止
※2</td></tr>
<tr><td>6
階</td><td>事務室</td><td>326.705</td><td>存置</td><td>同左</td><td colspan="4">廃　止</td></tr>
<tr><td rowspan="3">7
階</td><td>ﾚｯｽﾝﾙｰﾑ
（有料）</td><td>99.85
（60 席）</td><td rowspan="3">存置</td><td rowspan="3">同左</td><td>（改修）
※3</td><td>同左</td><td>（改修）
常設展示エリア・
視聴ブース
（5 ブース）</td><td>99.500</td></tr>
<tr><td>収蔵庫</td><td>260.00</td><td>存置</td><td>同左</td><td>（改修）
企画展示エリア・
演芸ステージ・
体験エリア・
エンディング通路
（事務室含む）</td><td>305.750</td></tr>
<tr><td>共用部分</td><td>250.093</td><td>存置</td><td>同左</td><td>（改修）</td><td>204.693</td></tr>
<tr><td></td><td>合　　計</td><td>3,591.979</td><td></td><td>2,107.639</td><td></td><td>609.943</td><td></td><td>609.943</td></tr>
</table>

※1　ライブラリーは、9 ブースに縮小のうえ 7 階へ移設

※2　平成 22 年 12 月に演芸ホールを廃止

※3　レッスンルーム（有料）を廃止のうえ、ライブラリー(9 ブース)及び事務室に改修

【管理運営】

期　　間	管　理　運　営	備　　考
開　館　　～平成 14 年　３月	(財)大阪府文化振興財団	管理運営委託
平成 14 年４月～平成 18 年　３月	大 阪 府	直営
平成 18 年４月～平成 22 年 12 月	（ＮＰＯ）ニューウエーブ日東大阪	指定管理
平成 23 年１月～平成 23 年　３月	大 阪 府	直営（休館）
平成 23 年４月～平成 27 年　３月	吉本興業グループ	指定管理
平成 27 年４月～	大 阪 府	直営

【歴代館長】

期　　間	歴　代　館　長　名
平成　８年 11 月　～	狛林　利男
平成 11 年　４月～	井上　　宏
平成 14 年　４月～	有川　　寛
平成 18 年　４月～	伊東　雄三
平成 23 年　１月～	★大阪府直営＜休館＞
平成 23 年　４月～	河井　　泉
平成 25 年　４月～	井上　　明
平成 26 年　４月～	田中　宏幸
平成 27 年　４月～	★大阪府直営

大阪府立上方演芸資料館　令和４年度年報

編集・発行　大阪府立上方演芸資料館
〒542-0075　大阪市中央区難波千日前 12-7
ＹＥＳ・ＮＡＭＢＡビル７階
TEL：06-6631-0884
令和５年 12 月発行